

口から出る音のならばを大切にすることの学習

塚田恭子ほか

1. 授業案

一、日時 昭和五十四年八月六日

午後一時～一時四十分

二、児童 長野県南佐久郡川上村立川上第一小学校

二年西組 男子十二名・女子十一名

計二十三名

三、領域 音声言語

四、授業テーマ 口から出る音のならばを大切にすること

ための学習

―歌(曲)と歌詞の結びつき―

五、授業テーマ設定の理由

本来、言語とは人間の理解行為、表現行為そのものであり、人間の言語習得は人間の感覚、感情、思考、構え等の発達と相まって進むものと考えらるべきである。その人間の感覚、感情、思考、構え等の発達を促しそれを直接的に示唆してくれるものとして音声がある。この場合の音声とは、すでに文字化され文章化されたものの音声を言うのではない。つまり、文字言語以前に言語の成立を認めないわけにはいかない。いわゆる

音声言語は、人間の本来的精神作用の表出というべきである。

「わあっ、ちっこい」は、「小さい」の特別表現でもなければ、「とても小さい」の翻訳語でもなかったはずである。子どもの発する音声言語は、精神作用及び肉体の反応、あるいはその成育そのものが表わされている。

ところで、われわれが日常、言葉という文字のならばとしての言葉を考えやすい。言葉使いが悪いという場合、場面に適した言葉の使い方が悪いといわれる。あくまで言葉のならばの方が問題にされる。果たして、言葉というものを考える時、言葉のならばの方、ならばせ方としてのみ考えることが適当なのであろうか。決してそうではないのではない。むしろ音声としてとらえなければならぬのではない。概念を対象とする以前に語気や音調を整えることが問題にされなければならなかったはずである。人間は、表現や理解をする時たよりにしているのは音声としての言語なのであるから。たとえば、「はい」と言えと言って「はい」と言う。その「はい」は、「はい」ではあるがどんな「はい」

かはその音声を聞いてみなければわからない。「はい」に音が伴ってはじめてその人間の感情や意志、構え等が表出するのであるし、聞く方もそれを知るのである。今回の授業は、素材的には歌を準備したが、歌(曲)と(歌)詞との分離もしくは結合の本来的な意識は、子どもと大人とにそれほど明確な差異があるとは思えない。自然に近い子どもたちの方にむしろ正しい人間本来の表現がある。

そこで、ここでは、言語の本質は音声そのものであるという自覚と、メロディー・リズム・テンポ・強弱・抑揚等、概念とは別の諸要素を大事にとらえ直させることによって、言語生活を本来的な楽しく力ある姿で発達させることをねらいとしたのである。

六、指導計画(一時間扱い)

七、本時の目標

音声概念過程から切り離して、音声そのものの感受性を引き出す。(方言、歌を使って)

八、本時の展開

学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点																				
<p>○ 学習開始のあいさつをする。</p> <p>(1) 本時の学習課題と方法を知る。</p> <p>①</p> <table><tr><td>ほ</td><td>い</td><td>い</td><td>い</td><td>い</td><td>つ</td></tr><tr><td>お</td><td>ほ</td><td>ほ</td><td>ほ</td><td>ほ</td><td>さ</td></tr></table> <p>を声に出 してみ てならびを 考える。</p> <p>②</p> <table><tr><td>ちよ</td><td>あ</td><td>そ</td><td>か</td></tr><tr><td>ひ</td><td>に</td><td>い</td><td>い</td></tr></table> <p>を声に出 してみ てならびを 考える。</p> <p>(2) ①「てるてるぼうず」の歌の歌詞をすてて歌う。</p>	ほ	い	い	い	い	つ	お	ほ	ほ	ほ	ほ	さ	ちよ	あ	そ	か	ひ	に	い	い	<p>○ 「ほおい ほい ほい はいさっさ」のばらばらのカードの中にどんな一連の音のなればきを聞きつけたか。</p> <p>○ 右に同じ。(右が歌の一節であるのに対して、方言を選んでみた)</p> <p>○ 「てるてるぼうず」という言葉の概念(歌詞)をすてたら曲だけで歌えるかどうか。</p> <p>○ ハミング</p> <p>○ スキヤット</p> <p>○ 歌詞を切り離れたら歌えない子。</p> <p>○ 一音だけで歌える子。</p> <p>○ 八行の自由な音の</p>
ほ	い	い	い	い	つ																
お	ほ	ほ	ほ	ほ	さ																
ちよ	あ	そ	か																		
ひ	に	い	い																		

<p>(3) ①「おさるのかごや」の歌を五十音図(別表1)にそって歌う。</p> <p>② 好きな曲を無意味な文字のならびにそって歌う。</p> <p>(4) 「ふじの山」の曲に自由に詞をつけて歌う。</p>	<p>組み合わせで歌える子。</p> <p>○ 曲と音声との組み合わせが自由自在であるかどうか。</p> <p>○ 学習のまとめをする。</p> <p>・ 先生と応答ごっこをする。</p> <p>「もう いいかい」 ↓「まあだだよ」 「タータタタタ」 ↓「タータタタ」 ○ 学習終了のあいさつをする。</p>	<p>○ 聞きつけた音声に聞きつけた気分を伴わせて反応を切りかえられるかを確かめる。</p>
--	--	--

九、評価

音声そのものの持つ感受性にどのように敏感か。また、抵抗があるか。

別表 1

あ	い	う	え	お
か	き	く	け	こ
さ	し	す	せ	そ
た	ち	つ	て	と
な	に	ぬ	ね	の
は	ひ	ふ	へ	ほ
ま	み	む	め	も
や	い	ゆ	え	よ
ら	り	る	れ	ろ
わ	い	う	え	を
ん				

別表 2

ひ	ろ	ゆ	し	か
ん	お	つ	わ	え
ほ	ら	と	や	の
す	な	い	こ	い
る	う	て	ふ	ま
み	め	は	え	ち
け	も	う	ね	き
を	よ	に	あ	へ
ぬ	れ	さ	た	む
そ	く	え	せ	
い				

2. 授業記録とその所見

Ti 今日ほちよとおもしろいことをやります。どんなことをやるかは見てのお楽しみ。

Ti (1)の①を掲示)

ここにはある音がかくされています。どんな音がかくされているかを見つけてほしい。今から自由に声を出して、かくされた音を見つけてもらいます。好きなようにやってください。

C (児童は緊張し声出す)

Tt (ここで一曲斉唱する)

Tt (①を指し) これ声に出してみよう。どこをとってもいいよ。

Tt (字をひろい、読んでみる)

Tt なんだ字を知っているじゃないか。じゃ、どれをとってもいいから声に出してごらん。

(それでも児童はあまり声が出ない)

Tu じゃあ、おじさんが読んでみるよ。

「おほほはささ」何だろうね。(下段の右側から読む)

何が出たね。「おほほは」というのは何か笑っているようだね。でも、「ささ」というのは何だろうね。だから、こういう読み方はだめ。全部まとめて読んでみるとみんなが知っている音が出てくる。そういう読み方をしてほしいんだ。

C (二・三名やってみたそうな顔をする)
Ti (指名)
C (全部できていないと言いながら)

「おほほは」という所にね、何か笑っているような気がする。

Ti (全部言葉が使えなくてもよしとする)
C 「おい」

C 「さささ」

Tu 今見つけた二つをくっつけてみるよ。

「おい、さささ」 みんなで言ってごらん。

C (くり返し五回程言う)

Tu 何か思い出さないかな?

C (五・六名挙手)

Tt (指名)

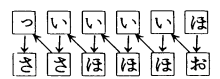
C 「おい さささ」の「お」を抜かして、「はい、さささ」

Tt 「はい、さささ」を「ほおい、さささ」にしてみよう。そうすると、まん中の所が抜けちゃうね、どうしよう。(「ほ」の字三つ「い」の字三つを指して)

C 「はい、さささ」(後の「はい」を使う)
Tt 「ほおい、さささ」と「はい、さささ」をくっつけてみます。「ほおい、はいさささ」

Tt あと残ったのどうしよう。

Tt (黒板の文字の並びに矢印をつける)



Tt 矢印通り動かしてごらん。

C ほおい、はいはいはいさささ。

Tt みんなつながったね。さあ通してみよう。

C (皆でくり返す)

Ti どこかで聞いたことがないかな?

C (オルガンでメロディーを流す)

C (児童声なし)

(導入として、子供たちのよく知っているであろうと思われた「おさるのかごや」の一節を選んだわけであったのだが、実際には子供たちはこの歌を知らなかったのである。それゆえに大変時間もかかってしまったし、本時に対する疑問を子供たちに与えてしまった。選曲が不適當であった)

Ti これは、「おさるのかごや」という曲の一部だったのです。この曲を知っていたら、字を見て、かくれていた音をみつけることができたのだと思います。

Tt (1)の②を掲示)

C もう一つ同じようにやってもらいます。

Tt 今度はいつもみんながやっていることがかかれています。見つけてください。

C 「ちよび」

C 「あそびにいかच्चよ」

Ti 今度は簡単に見つけられたね。

C 聞いたことがあるでしょう。いつ聞いた?

C 遊びに行く時。

Ti では、遊びに行く時のように言ってみてください。

C (ここで、児童の口から、「あそびにいかच्चよ」というよりも「あそびにいかच्चよ」と言うことの方が多いという意見が出たので「あそびにいかच्चよ」を使うことにした)

C (三人程言う)

Ti 人によって言い方が違っていいね。

C 「あそびにいかच्चよ」という言葉に変えたけども、その言葉の中にはいろいろな音がかくれていたね。では最後に、一人一人、自分の言い方で言ってみてください。

C (それぞれの言い方で言う)

Ti 次の勉強をします。今までは少しやり方が違います。

C (当初、「てるてる坊主」の曲を考えていたのだが子供たちがよく知らないということで「海」に変更した)

Ti オルガンである曲をひきます。まずそれを聞いてください。

C (「海」をオルガンで演奏する)

Tt 何の曲かな?

C 「海」(数名口にする)

Tt みんなで一度歌ってみましょう。

C (斉唱)

Ti 今、「海は広いな大きいな」と歌いましたね。では、今歌った言葉を使わないで、言葉を捨てちゃって歌うことはできないかな?

C (児童声なし)

C (どのようなことをやろうとしているのかわかっていない様子であった)

Tu 言葉を捨てたら歌えないかな？
Tu 歌えないと思う人手を挙げて。

C (挙手する児童なし)

(言葉を使わなくても歌えそうだが、どんなふう
にやったらよいのかわからないという顔つきをして
いる児童が大半)

Tu 歌えると思う人？

C (バラバラと六・七人挙手)

Tu じゃあ、おじさん、黒板に言葉を書くよ。

(と言って、黒板に歌詞を書く)

Tu はい、これで一度歌って。

C (児童歌う)

Tu 今度は、この言葉をだんだん消していくよ。(順
に消すのではなく、全体をうすく消していく)

Tu これで歌って。

C (児童、さっきより声を落として歌う)

Tu 今のみんなの歌はこれ位だったね。(うすくなっ
た黒板の言葉を指す)

Tu じゃあ、今度はみんな消しちゃうよ。

(黒板の言葉を全部完全に消す)

Tu はい、これで歌って。口をつぐんで歌うんだよ。

C 「ン——」(ハミングで歌う)

Tu 歌えた人？

C (ほとんどの児童挙手)

(「あれ？歌えた」という顔をしている児童が印
象的であった)

Ti 「ン——」ではなくて、違う歌い方はできな
いかな？

C (数名声に出して試みる)

Ti (「はひふへほ」を板書する)

Ti この言葉を使って歌える人？

Tt (手本をみせる)

「はーはーは、はははは、はははははー」

Tt わかった？ じゃ、やってみてください。

C (児童声なし)

Tt (今度は、「ひー」でやる)

Tt 今、先生は何の音使ってた？

C 「ひ」

Tt 自分でどれか使う音を決めてやってごらん。

C (それぞれ決めた音で歌う)

Tt 一つの音だけでなく、二つの音でできる人はいな
いかな？(指名)

C 「ひふふ へへはは へへふはへー、へへはは
はへへ へへはふふー」

(全員拍手かっさい。この児童、自分でも驚きの
様子)

(他の児童も試みるが思うようにならないような
ので、あいうえを五十音図(別表1)を掲示する)

Tt 「あいうえお、かきくけこ……」と順につけて
やってみましょう。

C (二度練習する)

Tt (指名)

C 「あーいう」あれ？

Tt もう一度やってみよう。

C 「あーいうえおかきくけ」あれ？

Tt 「け」までできたね。

(この後、少しずつ先へ進み、四人目の児童が最
後まで歌い切る)

Tt 次にやってみよう。

(別表2を掲示、別表2は、五十音をばらばらに
並べてある)

(練習二度)

Tt (指名)

「ひーろゆしかんを、つーわえーほーら」

Tt うまい、うまい。

C もう一人やってみよう。

Tt 「ひーろゆしかんを、つーわえーほーら」

C 上手だなあ。こっちの方がかんたん？

(不思議にこちの方がよくできていた。あいう
えお順だととらわれることが多いかと思われる)

Ti もう一つ、これで最後にします。今から塚田先生
がある曲をひきます。よく聞いて覚えてみてください。

(「富士山」の最初の四小節をオルガン演奏する。

この曲は児童の知らない曲である)

Tt 口をとじて歌ってみよう。

(五度、ハミングで練習する)

Ti 今のこの音に言葉をつけてみてください。

C (児童声なし)

Ti 言葉を音につける人になって欲しいんです。(こ
の間、オルガンでメロディーを流す)

C 「みーなさーん おーはよう ごーざいーます」

Ti (今日のまとめ)

今日は、ある言葉から音を探し出したり、音に言
葉をくっつける勉強をしました。みんながいつも使
っている言葉は音と切り離しては使えないんだとい
うことを知ってほしかったのです。これからも言葉
と音の勉強をするようにしてください。終わります。

※ 文中

Tt 塚田恭子(長野・川上第一小・教諭)

Ti 石本 栄(東京・四谷第六小・教諭)

Tu 上原輝男教授(玉川大学)